

原著論文

体験・表現型環境学習の方法についての考察

— 干潟における市民の造形制作活動から —

田中 宏実* 延藤 安弘**

千葉大学大学院自然科学研究科* 千葉大学工学部都市環境システム学科**

A Study on the Method of Action and Expression Oriented Learning:
Action through environmental art workshops with people's participation in tidal flat

Hiromi Tanaka*

Nature and Science Graduate School of Chiba University*

Yasuhiro Endoh**

Department of Urban Environment Systems, Faculty of Eng. Chiba University**

(受理日2002年8月22日)

This study is to consider environmental learning through environmental art workshops. The place is "Sanbanze" of the tidal flat in the Tokyo bay, and participants were young and old people. The characteristic of workshop was nature expedition of the tidal flat, and to realize and discover what it was. It was developed through the countless messages conveyed by our surroundings. Next the participants represented imagination, feeling and experience through creating environmental art. The art workshop concerning environment can foster stewardship of urban people and nature.

Key words: action, expression, environment, situated learning, tidal flat

1 はじめに

1.1 研究の背景と目的

人間も環境も相互に育みあう「まち育て」¹⁾が展開されていくためには、人間・環境系²⁾の中で緩やかに自己を環境へと開き、自然や人工環境との関係を育みながら、創造的に環境を発展させていくために行動する「環境市民」³⁾を育成することが必要である。

「環境市民」の育成のためには、まず各主体が環境に具体的に関わるタンケン・ハッケン・ホットケン⁴⁾などの身体を用いた直接体験を積み重ねていくことが重要である。このような体験活動による多様な対象との出会いは、主体の内に心が躍動するような“感動”を発生させる。では、その感動が実感ある経験となってもたらず意味を主体に定着させていくためには、感動を外へと「表出」し、環

境との関わりの意味を自らが明らかにしていく緩やかで鋭敏な感覚回路を主体の内に作り出していくことが必要である。そのような効果をもたらす環境学習では、身体的な「体験」とともに「表現」行為をおこなうことが有効な方法である。

表現行為の中でも、特に創造性を湧かせ“美的な経験”を大切にする表現活動が、参加者の持っている感性を呼び覚ます効果的な場となる(清水1997)。阿部(1996)は「美術教育がこれからの都市・地域・個人の身近な環境をつくる学習となり、それはモノ・ヒト・コト⁵⁾とのかかわりの中で、環境形成者、モノを生み出すヒト、自然を守るヒトを育成するものとなる」と述べ、都市・地域学習と美術教育を用いた環境学習の場が、環境市民の育成の可能性を内包していることを示唆している。このような見解をうけ、都市・地域とのかかわりの中で、その意味を深めるために表現を用いた環

問い合わせ先 〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33

千葉大学工学部都市環境システム学科延藤研究室 田中宏実

境学習を行なうことが、体験から得られた意味や価値を関連づけ、環境市民意識を生成させる感覚回路を主体の内に作り出すための効果的な学習になると考える。

これまでの参加型研究⁶⁾(米野1999)の中に、このような体験と表現の相互作用を活用し市民育成のプロセスを内包した活動の実践事例が見られる。そこでは多世代が共に市民参加のワークショップ(以下WSと略す)⁷⁾をする中で、体験と表現を活用する環境学習が実践されてきている。倉原(1999)は「まちづくりにおけるWSの試みは、住環境形成に赴きつつ関わる各人・各主体の自己を成長させる学習の場でもある」とし、主体的な市民を育成する学びの場としての体験と表現を活用したWSの価値を明らかにしている。

上記に述べたことをふまえ、本研究で考える環境学習とは、人間が環境⁸⁾との五感を通じたかわりを豊かにし、思いに浸された楽しいアクションを重ね感動を表現することにより、自らの内に環境への気づきといたわりの気持ちや愛着を育てていくことで、対象に自発的にかかわっていく態度をつくりだし、人間として生きる意味と価値を主体の内面に生成させていくプロセスのことをいう。

このような学習効果を生成させていくための方法として、体験と表現の相互作用が生成される環境学習をおこなうことが有効である。ゆえに本研究は、それを「体験・表現型環境学習」と呼び、その実践をとおして主体の市民意識を育む学習の状況づくりのプロセスを明らかにし、方法論としての可能性を探ることを目的とする。

1.2 体験・表現型環境学習における状況づくり

「状況づくり」について、これまで参加型集住体計画等の研究の分野において乾・延藤(1994)は「大筋の(事業を進めていく)方針が確信できれば、その方針に添ってまず、各主体間の柔らかい相互作用が生成するような状況をスタートさせ、創られた新しい状況が次の状況を生み、また状況が関係各主体の意識を変えていく連鎖的プログラムが展開される必要がある。このプロセス生成の仕組

みを状況のデザインとよぶ」とのべている。また、森永・延藤・横山(1995)はLPP理論(レイブ1993)に照らし、それをさらに発展させ、「状況づくり」を「人的・物的相互作用の中で、参加主体の集住意識を喚起することを促しつつ、デザイン行為を展開できるように状況を設定すること」と定義している。

表現活動について佐藤(1995)は「芸術のいとなみにおける表現は内から外へと向かう表出としての表現であるだけでなく、もう一面で、その表出を様式において統制し外から内へと回帰させる表象=再現としての表現である」と示唆している。

以上のような定義と示唆を踏まえ、本研究で考察する体験・表現型環境学習における状況づくりとは、主体が五感を通じた環境体験をし、そこで得た感動を造形などの美的な表現活動を通じて表出することで、感動が主体の内面に定着し、内なる世界(感性)と外なる世界(理性)への感覚回路が開かれ、生命・文化への気づきが高められるような状態を設定することとする。

2 調査概要

2.1 調査対象

環境保全団体が三番瀬の将来へ向けた市民による保全・整備を模索するために筆者らに協力を依頼し、共に三番瀬の環境学習の場としての価値を明らかにしようとするWSを企画・運営することとなった。本研究では、このような経緯のうえで行われた体験・表現型環境学習の状況づくりの要件をみたした4回のWSを調査対象とする(表1)。

本研究ではWSをおこなう場所を干潟に設定した。干潟は生命のゆりかごと呼ばれるように、泥と水との無境界な世界に多様な生物が息づいている。干潟を歩くことで直に五感が刺激され、人間の触覚を呼び覚ましてくれる。多様な生命や自然環境の不思議さは、人間を日常の人工的環境から開放し、生命文化多様性のなかの一部としての自分自身を再認識させる環境体験の場となりうる。また、貝や魚やノリが育ち、昔から漁場として地元住民の生活文化に深く関わっている。干潟は包

表1 ワークショップ概要

回数	第1回	第2回	第3回	第4回
ワークショップ主題	こんな三番瀬になればいいな	東京湾ダブル	三番瀬そのまんまミュージアム	市川クリーンアップ大作戦
月日	1998年11月8日	1999年5月30日	1999年8月8日	1998年11月21日
参加者	約130名	約90名	約110名	約45名
活動場所	三番瀬、船橋海浜公園	東京都野鳥公園	三番瀬、船橋海浜公園	三番瀬、市川塩浜
活動内容	干潟タンケン、布絵づくり	漁船、バスでWS場所へいく(図2参照)、環境体験と布絵	干潟タンケン、布絵とゴミオブジェづくり	素材探し、ゴミオブジェづくり
表現方法	布絵	布絵	布絵、ゴミオブジェ	ゴミオブジェ
次回へ生かしたWS視点	①東京湾の中にある三番瀬 ②環境破壊となるゴミ	表1 第一回WSの①を生かす	表1 第一回WSの②を生かす	表1 第一回WSの②を生かす
浮かび上がった参加者の共通意見	多様な生態系と五感の触発	両者をつないだ海と川という水のつながりと循環を意識した	ゴミオブジェはゴミに生命を与える作業で、汚いものがかきれいになる過程である	

表2 参加者の属性とその人数(人)

WS回数	大人		子ども				全参加人数
	一般	大学生	高校生	中学生	小学生	幼児	
第1回	57	6	0	8	25	0	96
第2回	31	14	1	25	9	0	80
第3回	28	32	1	8	10	1	80
第4回	27	6	1	0	2	1	37

括的に人間と環境との関係性を学べ、体験・表現型環境学習の状況づくりをする場として適している。

現在、東京湾の干潟はその90%以上が埋め立てられている。その最奥部の千葉県市川市行徳～船橋市の地先、広さ約1200haの干潟「三番瀬」(三番瀬を守る署名ネットワーク1998年)を本研究のWSをおこなう場所として設定した。三番瀬は都市に隣接する貴重な生態系の宝庫である。しかし、埋め立て計画が1960年代から始まり、計画の見直

しをめぐり行政・市民間の緊張関係が続いてきた(Onishi 1999)。現在、知事により埋め立て計画が白紙撤回されたことで、新たな価値の見直しと活用が模索されている。

2.2 調査方法

4回のWSの企画・運営に筆者らがかわり、全造形35作品について、参加者の様子や発話について観察調査をした。また、視覚的な表現内容と主体の意識の変化を知るために口頭発表を記録した。WSの過程で現れた状況の検証をするため、第3回WSにおいて班のリーダーにアンケートを行い、WSプログラム内の参加者の様子について聞いた(10作品中6作品)。他に、参加者へのヒアリングを行い足りない部分を補足した。以上のデータをもとに考察を行なう。

2.3 三番瀬での体験・表現型環境学習の概要

1) 三番瀬におけるWSの流れ

4回のWS概要は表1にある。第1回WSで、参加者の発話や作品から現れた“三番瀬の価値や問題を浮かび上がらせる視点”を、企画者は次回以降のWSのテーマとして生かしていった。第2回WSでは、「東京湾のなかにある三番瀬」という視点から、千葉側の参加者は、三番瀬から東京湾をわたり、一方、国立市側の参加者は多摩川を下って、中間地点の東京港野鳥公園でそれぞれの市民が合流し、共に布絵活動をした。第3回のWSでは、今度は国立市民が三番瀬にやってきて共にゴミオブジェづくりをおこなった。第4回WSでは場所を市川側の三番瀬に変え、ゴミオブジェ活動を展開した。このように各WSは、様々な主体が参加する中で場所やテーマを変更しながら進め、参加者の発話から生成された視点を次のWSへとつなげていくことで、三番瀬の課題をより鮮明に理解できるような学習の状況づくりをおこなった。

2) 参加者の概要

全WSは、筆者らが環境保全団体と共に主催し、第1、2、3回のWSでは、約90名前後の参加があった。第4回WSに関しては1999年11月市川市で行ったクリーンアップ活動(全体は900名以上参

加)の一部の活動として行い、約40名の参加があった。

参加者の年齢や階層は、幼児から高齢者、一般市民から市民活動家までおり、様々な主体のコラボレーションでおこなわれた(表2)。

3 体験・表現型環境学習のプログラムの検証

WSでは体験・表現型環境学習のプログラムを実践し、前述した状況づくりの要件を含め以下にある学習プログラムを実践した。ここでは、それをもとに第3回WSの6班(10班中)について、そのプログラム内容を検証する。

3.1 体験・表現型環境学習のプログラムづくり

体験・表現型環境学習を効果的に行なうため、以下の要件をプログラム(図1の<1>~<4>)に組み込み状況づくりをした。

[1] 直接体験：自然との五感を通じた触れ合いの場面をつくり、主体の感性を触発し、感動体験を呼び起こす。

[2] 異世代間交流：異世代の組み合わせの班をつくることで、異なった考えをもつ世代格差のない水平的関係を開き、他者と共に作業をおこない共有意識を育む。

[3] 美的表現手法：造形制作による触覚の刺激と美しさに感動する美的経験をし、班の作業の中で互いの知恵や技を交換する。

[4] 口頭発表：作品に込められた内容を、参加者全体の前で発表し、[1][2][3]で得られた主体の感動や班の共有意識の意味を浮上させ、さらに参加者全体の共感やズレの中で様々な意見を知る。

3.2 体験・表現型環境学習の内容と主体の状況

ここでは図1をもとに考察する。まず<1>干潟体験では、参加者は大人から子供まで多世代・他階層の7~10名程度の班をつくり、干潟の自然との触覚を通じた直接体験をする。そこでは、干潟の「生命」への感動の声や温かさ、ヌルヌル感という自己の「触覚」に対し驚くもの(図1の2、3、33以下同じ)。博士(地元の漁師等)を干潟探検の時

に配置し、それが参加者間の発話を活発にし、効果的な理解につながったと評価するもの(1、10、26)。さらにその博士との対話から感動を意味づける人間生活と三番瀬との文化的つながりへの気づき(11)が生まれていた。また三番瀬に詳しい子どもが大人たちに干潟の生態系を教える場面もみられ、子どもと大人の交流から新たな気づきが生まれていた(1、16、17)。またここでは作品の素材となる貝などのタカラモノやゴミ集めも同時におこなわれていた(27、39、40)。このように、干潟における環境体験は人間と環境、人間と人間どうしの親和的なかわり合いが生成される状況づくりの場となっていた。

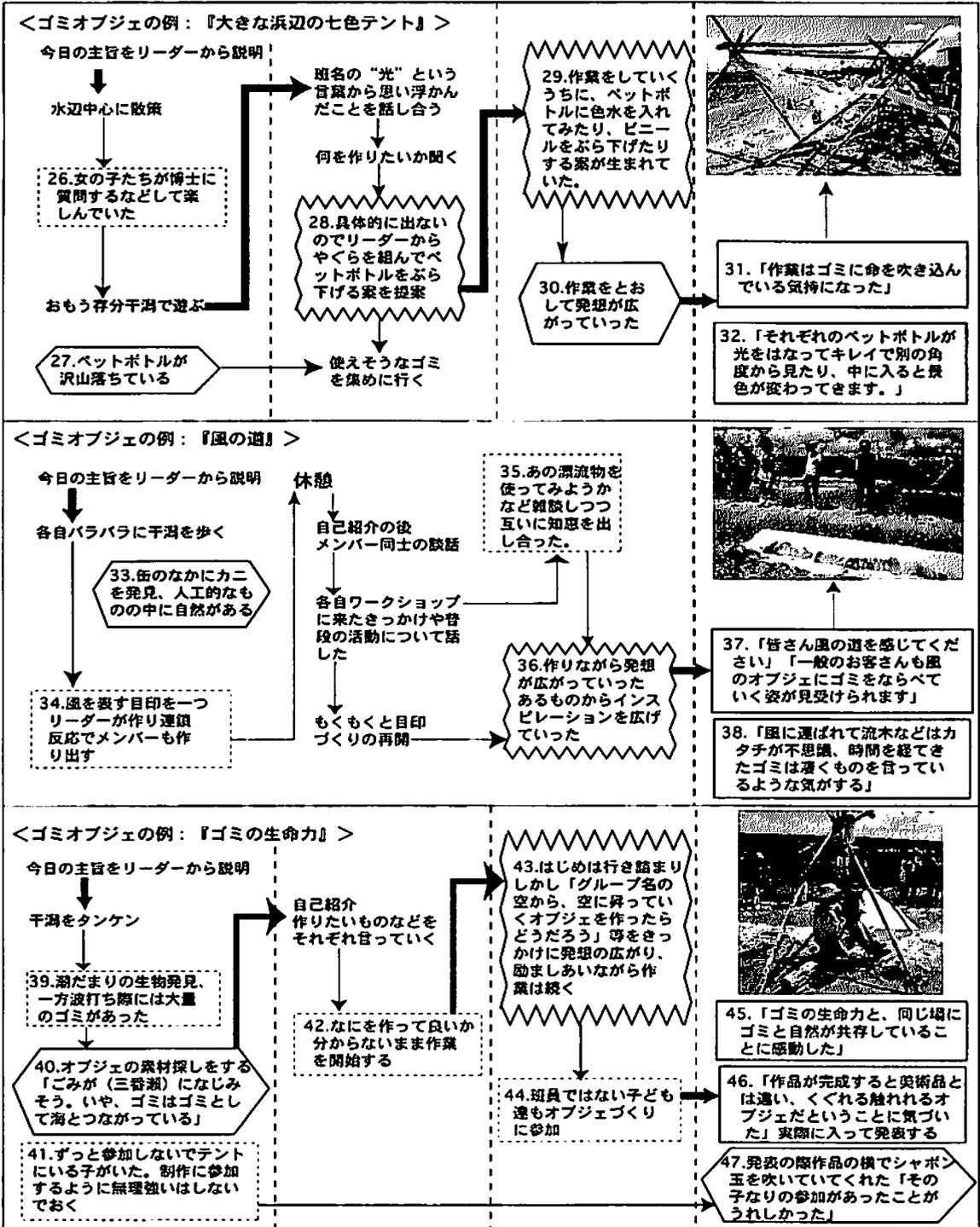
<2>各班の話し合いの中で、干潟で感じた事を発表しあい、作品のテーマをつくる。三番瀬の美しさに打たれた感動(5、6)や、時には子どもの発話から想像がふくらみ、そこから題材を見つけ出していくものもあった(12)。このように人間どうしの相互作用の中で感動体験を客観的に意味づけたり、想像力で膨らませたりしながらテーマを作っていた。

<3>『布絵』では、参加者が用意されたハギレを用い、<2>で話し合われたテーマに従い、各班ごと与えられた台布に、思い思いに切り張りしていく。最終的に干潟から受けた感動や制作作業を通して膨らんだ想像性が現れたパッチワークのような色とりどりの統一感ある作品ができる。布絵には世代格差や優劣を問わない近づきやすさや「遊び感覚で問題意識に触れられる」(20代女性)効果があり、自由な表現ができる特徴がある。「ゴミオブジェ」は干潟にあるゴミ(漂流物、捨てられ・不法に投棄されたもの等)を用いる。参加者はゴミに触れることで「制作で手を動かしているうちにだんだん発想が広がった」(30代男性)というように、人と素材が相互に触発しあいながら進められ、三番瀬全体を大胆に取り入れた、人と環境の一体感あふれた作品ができる。

<2><3>において、班で造形制作に挑む共同活動は、気づき(22、24、30)や想像力の膨らみをもたらす作業であった(8、13、23、29、36、43)。特にここでは、ひとつの作品を想像するために班員どう



図1 体験・表現型環境学習のプログラムとその内容



凡例 ○ = 気づき □ = 共有意識 ● = 想像力 → = 活動の流れ

しが意見を交換する事で、相互に触発しあい、協働で制作活動をする事で大人も子どももない人間どうしの水平的関係が開かれていく。作品作りは多世代が入り交じることで、偶発的出来事が発生し、予定しないプログラムが生み出されていく。例えば「バケツの中の食物連鎖」(図1)では、干潟での直接体験を異世代間で相互に触発しあいながら楽しみ、タンケン終了後「宝物入れ」として与えたバケツの中で起こった生物の食物連鎖を見た感動を、そのまま布絵に表現した。このように作品形態は参加者の協働効果と偶発的出来事が相互に作用してその形態が決まっていた。制作活動は、参加者が指先をとおし、環境体験で受けた感動を想像力で膨らませながら表出し、協働作業のなかで一つの作品の中に再現させていった。

〈4〉口頭発表では、表現したかったモノ・コトについて“生物になりかわり話す”、“干潟での経験を物語風に演じる”などの身体的行為をとおして表現された。特に「ゴミオブジェ」ではオブジェの中に入り、別な目線から環境を見ようという演出もあった(図1のゴミの生命力等)。それぞれが創意工夫をこらし視覚的表現だけではあらわせない感動を意味づけ発表した。

言語的表現における特徴をみると、特に布絵では班の共有意見として、三番瀬の自然環境の貴重さや価値を伝えるもの(9、14、15)、環境保全の気持ちに参加者以外にも広めようと訴えるもの(25)があった。ゴミオブジェづくりでは、ゴミが美しいものへと変わっていく体験を通じてゴミの価値が変容したことを伝えるもの(31、38、45)、さらにゴミオブジェのなかに入ることでゴミや環境への見方を変えようと参加者全体に呼びかけるものがあった(32、37、46)。〈4〉の口頭発表では、作品づくりで表出された主体の内に浮かんだ感動体験の再現(作品)に含まれる意味や価値を、さらに参加者間で言葉にすることで、それぞれの共感と考えの相違の中で新しい参加者全体のコンセプトとして浮かび上がらせた(表1の次回へ生かした視点等)。口頭表現は、主体の感動を言葉として表現することで意味づける、学習効果を持つものであった。

まとめると、体験・表現型環境学習の状況づけられたWSプログラムでは、参加者は環境体験によって五感が触発され、様々な感動を得た(〈1〉)。そして参加者間でその感動を共有することで主体間の開かれた関係をつくり、作品制作(〈2〉〈3〉)の中で感動を表出することで、その意味を作品に再現した。そして、口頭発表で言葉にすることで、感性が現実の社会とつながる理性として浮かび上がり価値づけられた(〈4〉)。体験・表現型環境学習は緩やかで鋭敏な感覚回路を主体の内につくり、参加者が経験したことを意味づけることで、感動を定着させる状況をつくりだした。

4 表現内容の特性

感覚回路が開かれたことで参加者はどのような意識を育んだのか、さらに考察をするため、三番瀬WSで試みた全作品(布絵25作品、ゴミオブジェ10作品)について視覚的表現(作品)と言語的表現(口頭発表)を検証した。

4.1 全作品の視覚的表現の特徴

1) 布絵の特徴

視覚的に見られる表現(表3のI)には、すべての作品にカニや鳥という干潟の「生命」や三番瀬の「環境」が描かれている。特に第2回WSの作品では、千葉と国立をつなぐ川の表現が多くあった(表3の第2回②⑥⑦⑧⑩)。そこで環境と人間がつながりあっていることへの気づき生まれ、さらに「人間と自然は共存しなくてはならない」(4.3節(1)で考察)や「人間と自然の間の境界を無くさなくてはならない」(4.3節(3)で考察)などの、人間・自然が共生することの価値の気づきが生成されていた。また、自然と対比される、干潟の周りのビルや飛行機等の人工環境の存在、ゴミが落ちていることへの指摘もあり、環境破壊を訴える発話につながった。また、人間や身体の一部を作品の中に表現したものもあり、干潟で受けた五感の刺激が、身体を通して印象や気持ちに影響を及ぼす効果的体験であることがわかった。このように干潟との親和的体験は、表現行為によって、自然だけではなく環境破壊や三番瀬を東

京湾文脈で捉えられるようになる、広がりをもった環境認識を生成させている。

2) ゴミオブジェの特徴

ゴミオブジェ（第3、4回）の素材の特徴（表4のI）を述べると、使われた素材として多かったのが流木、プラスチック製品、空缶など人間生活の廃物で自然には返らない素材である。それら素材の効果としては「素材からインスピレーションを得た」（図1の27、29、30、33、35、36）というように、素材が効果的に働いていることがわかった。また、干潟でWSをおこなったことで、第3回WSにおいては、全ての作品が干潟の自然を大胆に取り入れた形態となり（図1の大きな浜辺の七色テント等）、また、自分達自身が作品の一部になって発表する（図1の風の道、ゴミの生命力等）などの様子が見られた。このようにゴミオブジェでは、素材と干潟と人間が相互に浸透しあった作品が出来上がった。

4.2 口頭発表における言語的表現の特徴

各班の口頭発表では、視覚だけでは表現ができない作品に込められた意味が明らかとなった。その特徴から表3、4中のII（a）～（d）のように分類できた。（a）「生命・触覚への感動」で見られる特徴としては、布絵において全ての班が「生命」を表現しており、生き物との関わりの体験が印象に残ったことが伺える。（b）人間と「環境のつながり」では、約4割（35作品中14作品）においてその気づきが生まれていた。（c）「都市環境破壊」は、布絵14作品で語られていた。一方、ゴミオブジェでは、（c）についての発表が聞かれなかった。それは、ゴミという素材自体が都市環境の破壊を象徴するものとして視覚的に訴えかけるものであり、そのことが参加者の発言に影響したことが理由であると思われる。（d）では「環境保全意識」（10班）の他に、各班独自の「新しい環境とのかかわり方」が提起されていた。ゴミオブジェでは、環境の見え方が変わったこと、「作業はゴミに命を吹き込んでいる気持ちになった」（図1の31）といった新しい価値観が生まれていた。

表3のIIIにあるように、布絵の発表形式につい

ては、生き物に成り代わって気持ちを伝える寸劇などの身体を使った表現方法が用いられた。歌や詩という感性的な方法による表現もあり（図1の15）、それは他の参加者に作品の意味を伝える、効果的な役割を果たした。

4.3 作品中に再現として現れた市民意識

各作品には、新しい価値観や環境形成へむけた市民としての態度のあり方が現れていた。ここでは、具体的事例を示しながら、それぞれの内容ごとに評価していく。

1) 生物への感動から共生への憧れ

「タマ川ラブストーリー」（表3の第2回⑧、写真1）では、中央に模られている花嫁姿の少女とカニが結婚する物語がつけられた。そこでは、班員が海の生物達に成り代わり異生物間の結婚を心から祝い、共に調和して生きることへの憧れを表現し、他の参加者に人間と自然の共生への強い希望と環境を保全し新しく人間と自然の関係を作り出したいという願いを訴えるものであった。ここでは体験の中で触れた生き物への愛着をとおして、自然と共生して生きる新しい“関係づくり”をしたいという思いが生成されたことがうかがえた。



写真1 「タマ川ラブストーリー」

2) 環境へのいたわりから場所の整備の提案へ

「貝のみち」（表3の第1回⑦、写真2）では右下端に車椅子の女の子が模られている。「子供も大人もお年寄りも障害のある方もみんなが来られるバリアフリーの整備をした海辺づくり」、三番瀬のハードとソフトが一体となった新しい空間づくりへの提案が生まれていた。“三番瀬を包括的に捉え

る環境認識”を持つことで、“環境の質の豊かさ”に気づき、それが人間や環境をいたわる具体的整備の提案へとつながった。



写真2 「貝のみち」

3) 価値観の変化から新しい世界の創造へ

「赤い境界線をぶち壊せ」(表3、第2回②、写真3)では、子どもが発表時に布絵の一部となり、そこから飛び出す演出をする「はみ出す布絵」が作られた。それは都市と自然の対立的関係は、人間が自由な感性を持つことで超えられるという可能性を示唆したものであった。ここでは新しい社会は既存の価値観にとらわれず、“想像力を持って生きなくてはならない”という気づきを生成させていた。



写真3 「赤い境界線をぶち壊せ」

4) ゴミを通して三番瀬の価値を見出し残す

「三番瀬のファインダー」(表4の第3回③、写真4)は、「干潟探検で感じた生物、空、風の感触を残したい」という思いと、「人々に三番瀬の価値

を気づかせたい」という気持ちから、柵に白布を張り、班員の目の位置にあたる部分に穴を開け、そこから風景を見ることで、五感で感じた三番瀬の風景の記憶を未来へ向けて留めたいという思いを表現し、環境保全のためには人間の態度が大切なことを訴える作品であった。“感覚から受けた干潟の自然への驚きと、その価値の認識”によって、“心の目が大切”という意識を持ち、“他者の気づきも促そう”とする発表となった。



写真4 「三番瀬のファインダー」

5) 三番瀬に対する優しさから共生への願い

「ゴミスマスツリー」(表4の第4回⑤、写真5)では、自分たちが手を加えることでゴミの質を変え、三番瀬への贈り物という新しい価値を持たせた。それはゴミを美しいものに変え、人々のもと

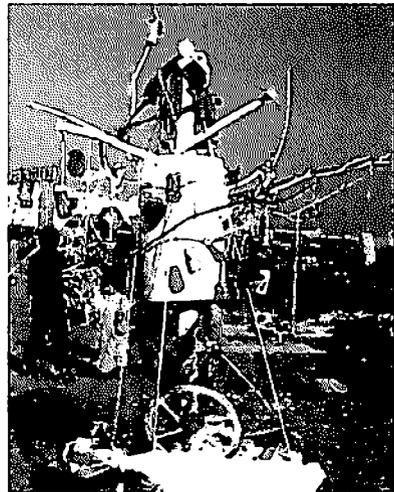


写真5 「ゴミスマスツリー」

へ返えしたいというやさしい気持ちを各主体が持つ事によって、人間と自然との共生関係づくりへ向かいたいという思いが込められた発表だった。環境を回復させるためには、自分たちの手でゴミが美しいものへと変わったように、“人間が三番瀬を未来へとつなぐ媒介となっていく必要がある”（表4の第4回⑤）という意識が生まれた。

以上、環境体験で生まれた感動は、視覚的表現と言語的表現によって表出され、三番瀬の将来のあり方を示唆する新しいコンセプトとなって浮かび上がったことがうかがえた。

5 まとめ

本研究では、干潟における環境体験と布絵・ゴミオブジェによる視覚的・言語的表現活動をおこなった。その状況づけられた環境学習のなかで、主体は環境の質の豊かさへの気づきを高める体験活動をし、表現活動を通して体験の感動を理性として定着させていた。表現された内容には、環境市民へとつながる価値や態度が生成されていることが伺えた。最後に、そのような効果をもたらした体験・表現型環境学習の状況づくりの共通原則をすくいあげ、そこに見られる可能性を提示しまとめとしたい。

5.1 環境体験が主体の感性を育む

環境体験は、生きた生命に触れ干潟の自然を五感で感じることで、自己を環境へと開いていく直接体験になった（図1〈1〉）。それは、偶発的な出会いや発見が連鎖的に続いていく（図1〈2〉〈3〉）ことで、主体が環境に内在する質的な意味や豊かさへ気づいていくプロセスであった。また、そこで生まれる偶然と必然の相互作用は、時には予想しない自己変容と創造的プログラムを生成する状況を作っていた。

5.2 体験と表現が感動を定着させる

プログラムの中で、環境体験から表現活動へとつながりをもたせることで、瞬時に消えてしまう感動を内から外へと表出し、参加者全体の相互応答の中で意味づけ、主体の内に定着させていく。そこで主体は、感性から理性へとつながる自己の感覚回路を開き、生命・文化とのつながりを実感

することで、人間と環境との関わりの意味の一端を明らかにしてきた。

5.3 相互啓発により多様な視点が生まれる

世代の差を越えて共に感動をわかちあい相互に触発しあう制作活動では、主体間の水平的な対話の関係がつけられた（図1の17子どもの言葉からの大人の気づき、図1の12、14、41、47子どもなりの参加のしかた等）。そこでは互いに知恵や技をだし、想像力が膨らんでいくことで多様な視点を生成させる協働効果が生まれていた。

5.4 言語的表現によるコンセプトのわかちあい

口頭発表で、言語的表現をおこなうことで「各回の参加者にコンセプトが伝わっていた」（40代女性）と評価されたように、作品の中に含まれる多様な視点を参加者間で共感することができた。その共感のなかで生成された新しいコンセプトは、干潟の未来の姿を方向づけ、さらに人間と自然との関係を回復・再創造させる社会変革の手がかりを垣間見せてくれた。

以上のことから、今回のWSの実践では、都市にわずかに残された干潟が市民にとって貴重な自然であるだけでなく、人間の感性を呼び覚まし、開かれた関係をつくる場として潜在的可能性を孕むことがわかった。また、そのような干潟の力を生かす体験・表現型環境学習は、主体の環境との能動的なかわりを生成させ、思いやりを持った環境市民を育む可能性を示した。

本研究では、体験・表現型環境学習の一プログラムの評価・検証を行なったが、このような環境学習を繰り返すことが、環境市民としての精神を養い、実際に行動していく態度を築いていくことにつながると考える。今後の課題として、さらに創意工夫を重ね体験・表現型環境学習の理論と手法の考察を深めていきたいと思う。

謝 辞

本研究の実践活動には多数の市民や専門家の方のご協力、ご助言を頂きました。皆様に心より感謝申し上げます。

注

- 1) 「まち育て」とは市民・行政・企業の協働により、環境の質を持続的に育み、それにかかわる人間の意識・行動も育まれていくプロセスである。R. B グラッツは「都市の再生」(林泰義監訳、富田鞞彦、他訳・晶文社・1993)において「都市の養育」(Urban Husbandry)を提起しているが、それに触発されつつ、関わる主体の育みを付加し、「まち育て」とした(延藤安弘「まち育てを育む」2001東大出版会)。
- 2) 人間は常になんらかの環境にいることが強調され、人間と環境との相互作用を一つの動きとして捉える。そこでは人間とは身体的・精神的・社会文化的側面とされ、環境は物理的、対人的、社会文化的側面を持つものとされる(S・ワップナー 1991「人生移行の発達心理学」北大路書房)。
- 3) 鳴海邦碩 編著 1999「都市のリ・デザイン」(学芸出版社)で、澤木昌典が「自らの関与する環境についてよりよくしり、そこに健全な生態系を形成しようとする市民」を「環境市民」と呼びその育成について言及している。本稿ではその論考をうけ、さらに考えを発展させた。
- 4) タンケン・ハッケン・ホットケンとは滋賀県白野町蒲生東小学校のみぞっこ探検の活動に由来する(水と文化の研究会「みんなでホタルダス」新曜社2000)。タンケンとは五感をつかって環境を感じることであり、ハッケンは気づきをうながし理解へとつなげていくことである。ホットケンは状況を変えようと次なる行動へ移ろうとする意識の育みである。
- 5) モノとは学習対象、環境要素、ヒトとは自分自身であり、一緒に活動する他者である。コトとは主体が関わる事でおこってくる出来事である。モノ・ヒト・コトの関係性を作り出していくなかで発生する相互作用は、主体の内部に学習に参加する意味を生成させていく。
- 6) 参加型研究は、研究者自らが参加の現場に飛び込み実践を重ねることが必要であり、こうして得られた「事例・体験の記録」から「共有化すべき知識を概念化する」ことが研究の方法である。
- 7) ワークショップとは、水平的関係にある各主体が、現実の住環境の一場面のあり方をめぐつ

て、知恵を出しあい、相互に啓発しあい、想像力を湧かせながら、建築・「まち育て」への共通の展望をわかちあう、一連の協働プロセスである。中野民夫は「ワークショップ」(2001岩波新書)のなかで、ジョアンナ・メイシーのつながりを取り戻すワークショップを例示している。ここではワークショップとは「自分自身とは何かを探求していくスピリチュアルな道」であり、「目前の現実にはきちんと向き合い行動していく社会変革の道」へのつながりを統合している貴重な行為だと言っている。

8) 環境とはただ単に自然環境として捉えるのではなく、人工・文化・社会・人・自然・精神という総合的な環境のこととして考える。

引用文献

- 阿部靖子, 1996, 美術教育における環境教育の意味とその視点, 美育教育, 46, 24-29.
- 乾亨・延藤安弘, 1994, 既存住宅市街地の共同建替の課題と展望, 都市住宅学会機関誌・都市住宅学, 6, 84-95.
- ジーン・レイブ・エティエンヌ・ウィンガー, 佐伯胖訳, 1993, 状況に埋め込まれた学習, 産業図書.
- 倉原宗孝, 1999, 市民的まちづくり学習としての住民参加のワークショップに関する考察, 日本建築学会計画系論文集, 520, 255-262.
- 米野史健, 1999, 建築・都市計画分野における住民参加研究の方法論に関する一考察, 日本都市計画学会学術研究論文集, 34, 295-300.
- 森永良丙・延藤安弘・横山俊祐, 1995, 「状況づくり」の視点からみた参加型集住計画の研究, 日本建築学会計画系論文集, 478, 69-78.
- 佐藤学・佐伯胖・藤田英典, 1995, シリーズ学びと文化 5 表現者として育つ, 東京大学出版会, 228-229.
- 三番瀬を守る署名ネットワーク, 1998, 未来に残そう三番瀬.
- 清水満, 1997, 共感する心, 表現する身体, 新評論.
- Takashi Onishi・Peter Marcotullio・Akira Saito, 1999, Environmental Impact Assessment and Plan Review for the Sanbanze Reclamation Project, Papers of 22nd Conference of Japan Association for Planning Administration, 147-154.